

そよ風通信

第5号

2021年6月発行

〒480-0392 愛知県春日井市神屋町713-8 TEL/0568-88-0811 FAX/0568-88-0839 <https://www.pref.aichi.jp/addc/>



院長就任ごあいさつ

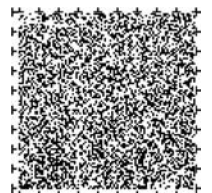
愛知県医療療育総合センター中央病院 院長

加藤 純爾

当院は、先天的、後天的を問わず身体的に障害のある人や、精神および行動に障害のある人、心の問題で悩んでいる人達により良い医療・療育を提供しようとする理念を掲げて、病院診療はもとより地域の基幹病院や医院、診療所、施設等からの相談に対応する一方、様々な情報発信や啓発活動にも取り組んでいます。当センターの理念に沿った診療を支えるために、医師、看護師、薬剤師、栄養士、リハビリ、放射線技師、臨床検査技師、臨床工学技士、臨床心理士などのメディカルスタッフ、保育士や社会福祉士、事務部門など多くの職種の職員が働いています。安全で質の高い医療を目指すことは当然ではありますが、私はスタッフが自ら進んで仕事がしたくなるような職場を作りたいと思います。患者さんが疾患と向き合うときにしっかりとサポートするためには、まず、医療提供者自身が心身ともに健康であることが前提と考えます。スタッフが働くことを楽しみ、患者さんファーストで明るく接することができれば、患者さんの病院ライフはもとより在宅医療の支援も充実したものになると思います。これまで患者さんからの要望やお叱りの言葉を受けることも、あるいは感謝の気持ちやお褒めの言葉をいただくこともありました。医療者は独善的にならないように注意すべきと考えます。これからも中央病院のより良い医療・療育の提供に向けたご意見をお寄せください。

Contents

| | |
|---------------------------------|-----|
| 院長就任あいさつ | 1 |
| このはネット紹介、新任医師紹介、 専門・認定看護師紹介 | 2・3 |
| 病棟紹介（内科混合病棟）、 診療科紹介（小児神経科） | 4・5 |
| 療育センターの活動、研究所トピックス （分子病態研究部） | 6・7 |
| Topics | 8 |



「このはネット」の導入と活用について

副院長 水野 誠司

医療療育総合センターでは、「電子@連絡帳」というプラットフォームを活用した障害児者支援の事業「このはネット」を始めます。「プラットフォーム」とは、ネットでの買い物やLINE、Facebookなど、普段意識せずに使っているコミュニケーションのための共通基盤システムです。

名古屋大学の先端医療開発部が開発した「電子@連絡帳」は、すでに高齢者福祉の領域で導入されています。「医療・福祉・介護」の専門職が情報を共有し、医療連携と地域包括ケアを統合的に実現するツールとして活用が進んでいます。

障害児者の分野でこのプラットフォームを活用して専門職間の情報共有を図り、患者さんに包括的な支援を行うのが「このはネット」です。愛知県の県鳥のコノハズクを元にセンターの石黒総長により命名されました。

医療療育総合センターに通う患者さんの多くは疾患毎の個別性が強く、その人の特性や特徴を福祉や教育の関係者とご家族とで理解して共有することが難しい傾向がありました。「理解の難しい子どもたちの理解」を助け、これらの関係者と患者さんのご家族との連携を円滑化することを「このはネット」は目指しています。まずは、少数の患者さんで試行して対象を徐々に拡大していく予定です。このシステムを利用したオンライン診療も実施する予定です。

プラットフォームは、活用する人のアイデアによって何千倍もの価値が生まれるものです。今後も「このはネット」について、関心をもっていただき、「こんな使い方ができるのでは」「この患者さんご家族には役に立つのでは」など、皆さんからのアイデアやご提案を頂ければ幸いです。



新任医師あいさつ

小児歯科 平井 辰宜

2021年4月1日付けで中央病院の歯科に赴任しました平井辰宜です。子供のころから競馬の騎手を目指しており、その流れで高校卒業後は競走馬の育成、調教に従事していました。(馬のことなら何でも聞いてください。) 歯科医師になってからは、口腔外科を中心に診療を行ってきたので、この分野は初心者になりますが、少しでも早く皆様の力になれるよう努めて参ります。色々ご迷惑をおかけすると思いますがどうぞよろしくお願いいたします。

専門・認定看護師紹介

当院には日本看護協会・日本精神科看護協会・日本重症心身障害福祉協会認定の資格を有した看護師が複数人在籍しています。各領域の専門性を活かし質の高い看護を提供するだけでなく、指導・教育を行うなど院内外で活躍しています。その中で、今回は慢性呼吸器疾患看護認定看護師と日本重症心身障害福祉協会認定重症心身障害看護師についてご紹介します。

慢性呼吸器疾患看護認定看護師



安江 昌子

慢性呼吸器疾患看護認定看護師は、「安定期、増悪期、人生の最終段階における患者とその家族のQOL向上にむけて、熟練した看護技術を用いて水準の高い看護実践をすること」が役割です。当院を利用される患者さんの中には、普段私たちが意識しないで出来ている『呼吸』をするのに非常に努力を必要としたり、呼吸を助けるために何らかの医療機器が必要な患者さんもいます。医療機器は上手に利用できれば、患者さんの状態の安定化やQOLの改善につながります。そうした機器の取り扱いやケアを患者さんやご家族にいかにもうまく利用してもらえるか、よいと思ってもらえるかを念頭に置き、少しでも楽に呼吸ができるように看護師として関わりたいと思っています。

現在は病棟に所属していますが、水曜日は外来の看護相談室に在室しています。お気軽にお声がけください。また、入院されている患者さんでも、相談事があればお話に伺います。その旨を病棟看護師にお伝えくだされば、日時の調整をいたします。

日本重症心身障害福祉協会認定 重症心身障害看護師



(写真左から原尚美・津本愛・横井圭子・堀江邦子・山本泰子)

重症心身障害看護師は、こばと棟に5名在籍しています。こばと棟で生活する利用者さんの一人ひとりの人生が豊かになるよう、思いやりの看護・心温まる療育の両面から支援しています。入所中の利用者さんだけでなくショートステイを利用される方にも安心して過ごすことができるよう専門性を活かし個別性を大切に支援を行っています。

また看護・療育スタッフに対し教育的活動を行うことも私たちの役割です。人生に寄り添い、少しでも充実した生活が送れるように何が最善なのかを利用者さん、ご家族、スタッフが一緒に話し合い、支援に繋げていくことが今後の課題だと考えています。

利用者さんが日々楽しく生活ができるよう、多岐にわたる専門性を活かした看護・療育を提供していきたいと思っています。

中央病院病棟紹介

「内科的治療を受ける患者さんとそのご家族のニーズを踏まえ、
いつも笑顔で誠実な対応を心がけています」

内科混合病棟

内科混合病棟は、神経内科・小児内科・成人内科の患者さんが入院しています。入院目的は、誤嚥性肺炎の治療やてんかんのコントロール、呼吸調整入院、MRI・VF等の検査入院、在宅支援（DICU）後方支援、レスパイトケア、短期入所、被虐待児の保護入院等多岐に及んでいます。

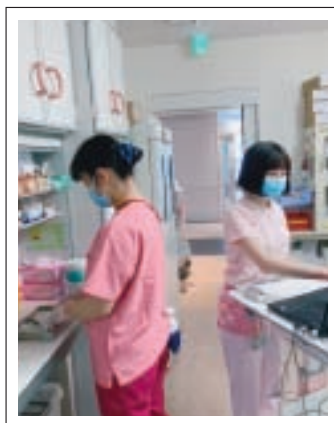
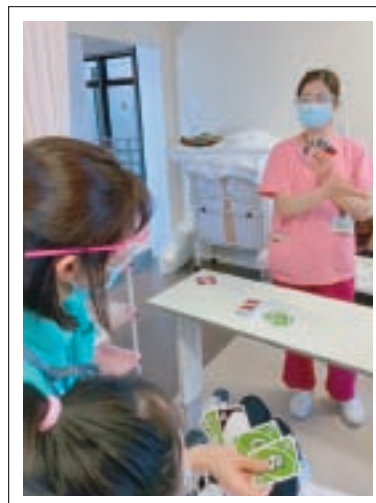
看護スタッフは家族看護・家族支援を大切にしながら、医師・MSW・PT・OT・ST・臨床工学士・保育士など多職種で協働しながらチーム医療に取り組んでいます。

患者さんにご家族に寄り添い、関わりを大切にしながら患者さんがその人らしく入院生活を送って頂けるよう日々心がけています。

それぞれのスタッフは専門的な知識を身につけるため、学習会や研修会に積極的に参加し、知識・技術の向上に努めています。そして、スタッフ全員がいつも患者さんやご家族に笑顔で接することや誠実に向き合う姿勢を心がけ、お互いが良いコミュニケーションを取りながら安全・安楽で、質の高い看護を目指しています。日々のカンファレンスでは、患者さんの個別性を重視し、その人に必要な看護は何かを常に考えながら話し合っています。

病棟には医療保育専門士の資格をもつ保育士が1名勤務しています。入院生活を送る患者さんの成長発達の促進、維持を考えた保育に取り組んでいます。また療養環境にも目を向けながら、患者さんにご家族に季節を感じて気分転換を図っていただけるように、行事の企画や装飾を行っています。そして患者さんにご家族の思いに耳を傾け、多職種と連携を図りながら入院中のQOL向上に取り組んでいます。

そしてスタッフ全員が大切にしていることは、患者さんやご家族とのコミュニケーションです。患者さんの中には、自分の思いや感情を上手く表現できない方がたくさんいます。私達は、表情やしぐさを丁寧に観察し、細かな変化にも気を配り、1人1人が表現している思いを共有すると共に、相手の気持ちを敬う倫理観を大切に看護をしています。



診療科紹介 — 小児神経科 —

小児神経科はこどもの神経系の病気を扱う診療科です。

神経系の病気はいくつかの側面から分類することができます。例えば、神経系のどの部位が悪いのか（脳・脊髄・末梢神経、および筋）、どの時期に生じたのか（遺伝性、周産期、出生後）、目に見える病変があるのか（器質性）あるいはないのか（機能性）、病変の種類（先天異常、低酸素、虚血、出血、外傷、腫瘍、炎症、変性、自己免疫、など）、時間経過（急に発症するのか、徐々に悪化するのか、良くなったり悪くなったりを繰り返すのか）などにより、多彩な病気が存在します。ありふれた病気ですぐに診断がつく場合もあれば、まれな病気で診断が難しい場合、あるいはなかなか診断がつかない場合もあります。



病気は多彩ですが、受診するきっかけは「運動発達の遅れ・異常」「精神発達の遅れ・退行（できていたことができなくなること）」「ことばの遅れ」「発作的な症状（けいれんや意識障害など）」などの訴えがほとんどです。訴えが病的なのかどうか、病的とすればどのような病気なのかをきちんと診断して、治療法のある病気を見逃さないこと、治療法がなくても、症状を軽減し成長や発達を促す手立てを考えることが小児神経科の役割です。

病気は多彩ですが、受診するきっかけは「運動発達の遅れ・異常」「精神発達の遅れ・退行（できていたことができなくなること）」「ことばの遅れ」「発作的な症状（けいれんや意識障害など）」などの訴えがほとんどです。訴えが病的なのかどうか、病的とすればどのような病気なのかをきちんと診断して、治療法のある病気を見逃さないこと、治療法がなくても、症状を軽減し成長や発達を促す手立てを考えることが小児神経科の役割です。

もう一つの大きな役割は、障害をもつ患者さんの生活を支える医療です。重症心身障害児（者）や超重症児（者）と呼ばれる方々は呼吸・循環・栄養・てんかん発作・筋緊張亢進・身体変形・疼痛・睡眠など様々な面で問題を抱えており、ご本人の苦痛に加え介護者の過大な負担をもたらしています。これらの治療の中でも、近年ではとくに在宅人工呼吸管理を数多く手がけています。非侵襲的陽圧換気と排痰補助装置の進歩により、気管切開をせずに呼吸補助を行うことが増えてきました。気管切開が必要な場合も、小児外科と協力して安全な管理を心がけています。また介護者の休息のためのレスパイト入院や、新生児集中治療室から在宅生活への移行の橋渡しも行っています。

中央病院での小児神経科は、「よろず相談窓口」的な側面もあります。気になることがあるけれど、どこで診てもらったらよいかわからない場合は、私たちにご相談ください。



障害児等療育支援事業

療育支援センターの紹介

今号では、地域支援課発達障害・療育支援グループが担当しております『障害児等療育支援事業』の概要についてご説明します。

この事業は、障害のある方もない方も地域で安心して暮らせるような支援体制を整備していくことを目的としています。県内障害保健福祉圏域ごとに（名古屋市除く）に設置された13支援施設がコーディネーターとなり、必要に応じて拠点施設である地域支援課（発達障害・療育支援グループ）や中央病院を始めとする当センタースタッフが（要請のあった）地域へ直接伺って共に支援を行っています。

《本事業において大切にしていること》

◇地域で暮らす障害のある人や配慮の必要な人を実際に支えている方々に対する支援やスキルアップへの取組み

(1)事例を通じたケース検討

- ・できるだけ多くの関係者に参加していただき、顔の見える関係づくりや、連携構築のきっかけとしています。（親子通園施設、保育園、幼稚園、児童発達支援センター、保健センター、小中学校、相談支援事業所等の職員）
- ・個別の事例を通して、同じような生きづらさを抱えるお子様への対応方法や見立てなどを学ぶ機会としています。

(2)講演会、勉強会の開催

障害に関する基礎知識を始め、地域連携や保護者支援など、各市町村からの希望に沿った内容についての講演や講演後にグループワークを行ったりして、参加された方が聴講のみに留まるのではなく『自分で考える』時間にもなるように工夫を凝らしながら実施しています。

◇保護者への支援

(1)保護者向け講演会

子育てのポイントやご兄弟との関わり方、気持ちの折り合いのつけ方、将来にむけての大切にしたいポイントなど、各支援施設が調整し、様々なテーマに沿って実施しています。

(2)グループ相談会への参加

保護者同士の意見交換やつながりの場となるように、アドバイザーにとどまらず、保護者間での活発な意見交換を促せるようにファシリテーターとしての役割を意識しながら参加しています。

◇その他の取組み（当センター主催）

(1)療育研修会の開催（年10回程度）

県内広域に参加のお声がけをし、関係機関職員の方を対象としたスキルアップの機会を提供しています。

(2)支援施設担当者会議（年4回）

各市町村の状況や支援施設の支援方法等の情報共有の場として開催しています。

はるひフォーラム



はるひの家と親子療育の家では年に一度『はるひフォーラム』を開催し、それぞれが行っている取り組みを発表しています。今年は2月18日に開催し、他部署の職員にも多数参加していただきました。今年は、はるひの家で行っている療育の中からスヌーズレンと感覚統合的アプローチの2題の発表がありました。

スヌーズレンは、利用者一人ひとりに合わせた環境づくりを行うためにチェック表を使うなど工夫を行いました。その結果、利用者は楽しそうにスヌーズレンに望んでいるという報告がありました。感覚統合的アプローチは、作業療法士と連携して支援をすることにより、利用者が座位を保つことや手先を目視することができるようになってきたなど良い結果

が報告されました。筆者は初めての参加でしたが、利用者支援に非常に役立つ内容であり今後の支援に大いに活かしていきたいと思いました。

当部門では、自閉スペクトラム症、知的障害および乳幼児てんかんの患者さんから見つかった新たな遺伝子の変化が、特に神経細胞の構造や機能に及ぼす影響を明らかにし、病気の成り立ちを明らかにすることを目指しています。

ここでは最近のトピックスを2つご紹介します。

発達障害研究所 分子病態研究部 研究員 野田 万理子

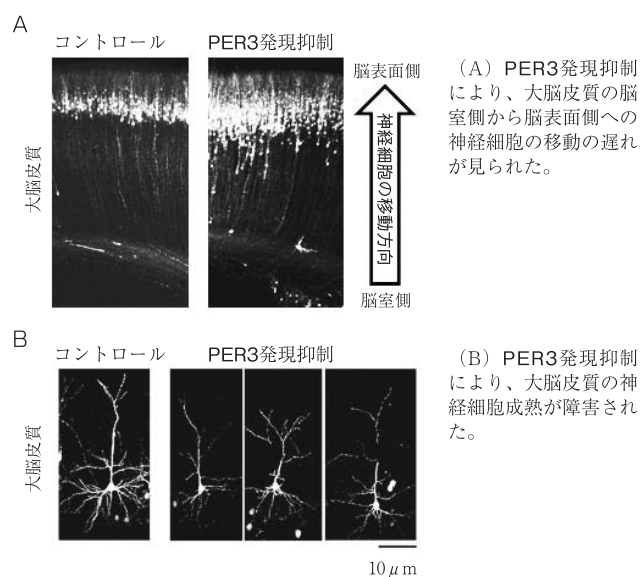


自閉スペクトラム症は睡眠障害と関係する？

自閉スペクトラム症の患者さんの半数以上に睡眠障害があることが明らかとなっています。しかし、自閉スペクトラム症と睡眠障害の関係については、ほとんど明らかになっていません。私たちはこれまでに、自閉スペクトラム症の患者さんで睡眠を司る時計遺伝子のいくつかに変化が見られ、それが基になって神経細胞の形や機能に変化が引き起こされることを明らかにしてきました。神経細胞はすべて、誕生した場所から移動して配置され（図A：コントロール）、その場所で突起を伸ばして成熟します（図B：コントロール）。これらのイベントの大半は胎児期に起こり、ヒトやマウスといった哺乳類の脳では、基本的に共通したメカニズムで制御されています。

自治医科大学との共同研究により、時計遺伝子の一つであるPER3の変化が睡眠障害を伴う自閉スペクトラム症の患者さんで見つかりました。そこでPER3遺伝子の発現をマウス胎仔（胎仔：産まれる前のお腹の中にいる状態の動物の子供）の脳で抑制したところ、神経細胞の移動が障害され、神経細胞の突起の形成にも異常が見られました（図：PER3発現抑制）。したがって、PER3の機能が障害されることで、自閉スペクトラム症が引き起こされる可能性があることが明らかになりました。

図 PER3発現抑制による神経細胞移動障害と形態異常



脳を作るのは神経細胞だけじゃない？

脳を構成する細胞には様々な種類のものがあります。もちろん神経細胞が主体ですが、それ以外にも神経細胞の間に存在するグリア細胞や、脳に栄養を行き渡らせる血管を構成する細胞などがあります。脳が高度な機能を持つにしたがって、脳細胞全体に占めるグリア細胞の割合は高くなると考えられており、ヒトでは神経細胞と神経細胞以外の細胞の総数は同じであることが報告されています。当部門では、グリア細胞の中でもっとも数が多いアストロサイトに注目して、その誕生や移動のメカニズムの解明にも取り組んでいます。

Topics

～はるひの家編～

自立課題



色々な形（形合わせ）



弁当の醤油入れに蓋をはめています。



自立課題専用の部屋

自立課題とは、主に自閉症の人を対象にした机で行うことを中心とした教材で「構造化」という手法を用いて、始めから終わりまで自分一人で行い取り組むことができるように設定された活動を指します。

自立課題は、自立を育て、認知・言語理解など学習基礎スキルを育て、感覚への働きかけ、余暇活動への応用、職業スキルへの応用への有用性があるとされています。はるひの家では、令和2年度より環境を整え、実践を始めています。

～こばと棟編～

オンライン面会・意見交換会



こばと棟では、新型コロナウイルス感染症による緊急事態宣言発出中、ご家族の面会制限がある期間は地域支援課と協力しオンライン面会を実施しました。画面を通してのご家族の語り掛けに、利用者さんの表情が穏やかに、そして笑顔に。時には家族が歌う声にウトウトと眠ってしまう事も。早くコロナ禍が終息していつもの面会になることを日々願っています。

また、毎年実施している中央病院副院長と利用者さんとの意見交換会をコロナ禍のため今回は病棟ごとで行いました。「ボランティアさんに会いたい」「外出したい」など制限されている日常生活の戸惑いを伝えていました。三浦副院長からは、「ボランティアさんとオンライン面会はできないだろうか」と具体案を頂くなど有意義な時間となりました。「かっこいい職員さん来ないかなあ」と心の声を聞いて頂く機会にもなり、意見交換会を終えてからの参加利用者さんのすっきりとした表情が素敵でした。